



---

# 質的

基本原理・分析技法・  
ソフトウェア

---

# テキスト 分析法

---



ウド・クカーツ著  
佐藤郁哉 訳

質的データをどのような方法で  
分析していけばよいか  
なぜ、そのような方法・技法が  
最適なのか

文字テキストを中心とする質的データ（インタビュー記録、フィールドノーツ等）を分析し、その分析結果を論文にまとめていく際の手順をステップ・バイ・ステップで具体的に解説。さらに、それらのテクニックの前提となる基本的な発想についても理論的背景から説き起こす。質的研究を志す全ての人々にとっての必読書！

新曜社

---

質的

基本原理・分析技法・  
ソフトウェア

---

テキスト

---

分析法

---

ウド・クカーツ 著  
佐藤郁哉 訳

新曜社

QUALITATIVE TEXT ANALYSIS

by Udo Kuckartz

Copyright © 2002

Japanese translation published by arrangement with  
Udo Kuckartz through The English Agency (Japan) Ltd.

## 日本語版への序

本書のドイツ語版の初版は、今から5年以上前の2012年夏に出版された。その2年後には、英語版が、研究方法と方法論に関する書籍の出版で世界的によく知られている出版社であるSAGE社から刊行されている。そして、初めての日本語版が本書である。本書の刊行は、著者にとって何物にも代え難い喜びとするところである。というのも、欧州の社会科学者の書いた本が日本語に翻訳されるのは近年ではかなり稀なことだからである。

拙著の邦訳がこうして出版されることになったのは非常に幸運なことである。より正確に言えば、同志社大学の佐藤郁哉教授との友情という幸運に恵まれたことによって、本書の刊行が可能になったのである。佐藤教授は、コンピュータを活用した質的データ分析についてかねてより関心を持たれており、教授自身がこの方法についてこれまで2冊の書籍（『質的データ分析法』『実践質的データ分析入門』）を出版されている。

本書の企画が著者と佐藤教授の会話を通して最初に持ち上がったのは、2014年に横浜で開催された世界社会学会議（「不平等な世界に直面するグローバル社会学への挑戦」）の席上である。世の常ではあるが、様々な事情によって企画が現実のものになるためには多少の時間がかかることになり、それから4年の歳月を経てようやく刊行の運びとなった。社会科学的な素養を持つ翻訳者を見つけることが非常に困難であることが判明したこともあって、結局、刊行企画の当初から深く関与されていた佐藤教授自身に翻訳を引き受けていただくことになった。この4年のあいだに様々な点において佐藤教授にいただいたご厚誼と教授がおこなわれた素晴らしい翻訳に対して、改めてここに感謝の念を捧げたいと思います。

著者としては、この本が日本における質的研究の進展に対して貢献していくことを期待したい。質的研究は、これまで長いあいだにわたって、方法論のスタンダードや研究の質に関する基準が存在しないという点について批判されてきた。その後の展開によって、近年では若干事情が変わってきてはいる。しかし、現在もなお体系化された質的方法は発展途上の段階にあると言える。本書では、そのような点を念頭において、実践的なアドバイスとステップ・バ

イ・ステップ式の解説を盛り込むように心がけた。

質的データ分析法と MAXQDA のようなソフトウェアとのあいだには明白な関係がある。本書で解説しているように、QDA ソフトウェア (QDA は Qualitative Data Analysis の略語) は質的データを集中的かつ効果的に分析することを可能にしている。しかし、質的方法それ自体の発展という点では、コンピュータ・テクノロジーの目覚ましい発展と比較すれば遅々たるものがある。事実、質的方法に関する教科書を見てみると、鉛筆、ペン、あるいはタイプライターのような道具以外には特別な技術を用いなくても質的分析が可能であるかのような書き方がなされている例が少なくない。しかし、現実の世界におけるテクノロジーの急速な進展には目を見張るものがある。実際、たとえば、今日フィールドワーカーはスマートフォンを使って質の高い動画を記録し、インタビューの音声データをその文字起こし記録と同期させながら再生することができる。また、複雑なコーディングの枠組みでデータをコーディングした上で、様々な角度からデータ検索をおこなうこともできる。このような点も含めて、次代の社会学者たちは、研究法とソフトウェアとの関係についてこれまで以上に認識を深めていくものと思われる。

さて、質的方法は、今後どのような方向に進展していくであろうか？ このグローバル化した社会におけるコミュニケーション・メディアの急速な発展、特にソーシャル・メディアの発展は、質的テキスト分析法にとっての大きな挑戦課題になっている。ソーシャル・メディアについては、とりわけ2つの展開が注目に値する。1つは、比較的大きなサンプルサイズという点である。たとえば、ツイッターのデータを分析する場合がその典型である。この場合、サンプルが1万を越える例も少なくない。注目すべき2点目のポイントは、このような種類のデータの場合はネットワーク的な側面が非常に重要な意味を持っているという点である。本書で解説されている分析法についても、今後このような方向性に注意を向けていく必要があるだろう。これは、取りも直さず大量サンプルのデータとネットワーク分析とを組み合わせることを意味する。これら2つの展開は適切なソフトウェアの使用なくしては考えられないものである。これが、質的研究法が将来たどっていくであろう方向性に関する3つ目の重要なポイントである。つまり、分析法とソフトウェアとのあいだには、今後より強固で密接な関係が築かれていくと考えられるのである。社会科学的研究法のデジタル化はさらに進展していくであろう。また、ここで指摘した3つの

傾向は、グローバルな規模でネットワークが形成されていくことにもなって世界中で急速に展開を遂げていくことは確実であると思われる。

Udo Kuckartz (ウド・クカートツ)

ベルリンにて 2018年1月



## 序

本書は、質的データの体系的な分析に関する実践的なガイドブックを書こうという、著者が長いあいだあためてきた計画にもとづくものである。著者は、大学教師の1人として、大学院生や博士候補生が質的データの分析をおこなう際に、どれだけ深刻な不安にかられるものであるかを見てきた。途方に暮れた彼らは、何らかの適切な分析法、特に、できるだけ正確であり、かつ実際に自分で分析をおこなう際に適用できるような技法を切実に求めていた。本書は、そのようなニーズに応えるものである。この本では、質的なテキスト分析の本質的な要素となっている幾つかの手順について簡明に示す一方で、① テーマ分析、② 評価を含む分析、③ 類型構築式分析、という3つの主要な方法について詳しく解説している。

本書で解説を加えている質的テキスト分析は、以下にあげる非常に多くの伝統を受け継いでいる — テーマ分析、グラウンドデッド・セオリー、古典的内容分析、その他。つまり、本書で見えていくのは、一種の解釈学を基本に置いた体系的な分析法なのである。

ヨーロッパ諸国では、「質的データ分析 (qualitative data analysis)」という用語がその種の分析法に対してあてられることが非常に多い。もっとも、英米圏の場合は、「内容分析 (content analysis)」という言葉が、量的分析の方法論との連想で取り上げられることの方が圧倒的に多い。したがって、英米圏では、「質的内容分析 (qualitative content analysis)」というのは根本的な矛盾を含む言葉のようにとらえられてしまうだろう。

その種の誤解を避けたいということもあって、本書では「質的データ分析」にかえて「質的テキスト分析」という用語を使うことにした。本書では、それぞれが独特の特徴を持った3種類の質的テキスト分析法について詳しく解説していく。特に、複雑なタイプの分析法と調査結果の提示法に重点を置いて見ていくことにする。質的テキスト分析の可能性は、近年顕著に見られるコンピュータ・テクノロジーの進歩によって大幅に拡大している。したがって、本書では、QDA ソフトウェアを使用して分析する実践的な可能性についても解説していくことにする (QDA は、Qualitative Data Analysis (質的データ分析) の略



語である)。

本書で解説していく3つの分析法(テーマ中心のテキスト分析、評価を含むテキスト分析、類型構築を目指すテキスト分析)は、それぞれ独特の特徴を持つアプローチであるが、一方では2つ以上の分析法を組み合わせて使用することもできる。Uwe Felick(2006, pp.295-298)は、質的データ分析法の分類について、「コーディングとカテゴリー構築」と「シーケンス分析」(これは、さらに会話分析・ディスコース分析とナラティブ分析・解釈学的分析に分けられる)という二分法を採用している。本書で解説している3つの方法は、このうちの前者のグループに属するものである。つまり、3つとも**カテゴリーを中心にして質的データを体系的に分析していく方法**なのである。

Clive Sealeや他の論者(Seale, 1999b; Seale & Silverman, 1997)と同じように、本書では、質的社会調査に関する方法論的な厳密性を重視している。著者は、社会科学における他の分析法と同じように、質的テキスト分析の場合も、分析法に関する正確な記述を心がけること、また明確な評価基準が存在するという点について認識しておくことは、本質的に重要な事柄であると考えている。コンピュータを利用した新しい分析法が開発されてきたことによって、現在では、コーディングに関する様々な方法や分析上の覚え書きを書いて他の要素にリンクさせる方法に始まり、複雑なモデルの構成や質的データ分析の図解法にいたるまで、分析の質を向上させる上で非常に有効で強力なツールが利用できるようになっている。データにより密着した分析と説明可能性・透明性・記録性の向上は質的分析の信憑性を高め、したがってまた、学問の世界一般での適用可能性を広げていくものであろう。このような理由から、本書における解説は、最新の情報処理技術の利用を前提にしている。また、それぞれの技法に関する解説でも、コンピュータを不可欠の分析ツールの1つとして想定している。

本書の目的は質的テキスト分析の実際の手順を紹介することであり、分析例としては質的インタビューの例、より具体的に言えば一定のガイドラインに沿っておこなわれたインタビューの資料を使用している。理論的に言えば、本書で解説されている分析法は、他のタイプのデータ、たとえば、ナラティブ・インタビュー、観察プロトコル、視覚的データ、画像、文書等についても適用できるものである(もっとも、それらのデータの場合には、本書の解説内容に対して若干の調整が必要になるだろう)。本書で紹介されている3つの方法は、決して厳格な「お作法」のようなものではない。これら3つの方法は、実際の調

査プロジェクトで分析作業を実施していく際には、それぞれの研究で採用されている基本的なアプローチに沿って適宜変更や拡張を加えたりしても構わない。また、特定のテクニックだけを採用しても一向に差し支えないのである。この点に関しては、評価的分析法を柔軟に適用していくことについて述べた、Huberman と Miles による以下のような主張をあげておきたい。

データ分析というのは、既製品というよりは特別注文品であり、また状況にあわせて改訂したり、適宜「振り付け」を施されたりするものである。(Creswell, 2003, p.142 に引用)

したがって、この本は、質的データ分析に関する「万能サイズ (one-size-fits-all)」のアプローチを提示するものではない。むしろ、本来、個々の調査プロジェクトの個別事情にあわせて調整が必要となる方法を示しているのである。

本書の構成を以下に示す。「質的データを分析する — さて、いかにおこなうべきか？」と題された第1章では、分析法に関する基礎知識について解説するとともに、調査におけるリサーチ・クエスチョンというものが持つ重要性およびその中心的な役割について強調する。ついで2章と3章では、厳密な意味での質的テキスト分析の特徴について扱う。2章では、質的テキスト分析法の様々な「ルーツ」を、たとえばグラウンデッド・セオリー、テーマ分析あるいは古典的な量的内容分析から質的テキスト分析に至るまでの経緯をたどって見ていく。続く3章では、質的テキスト分析の基本概念と一般的な手順について解説する。4章は本書の中核を成す部分であり、3つの分析法について詳しく解説する。5章は、インタビュー内容の文字起こし（書き起こし・テープ起こし）から調査結果の提示や図解による表示の方法にいたるまで、分析の手順全般にわたってコンピュータ・ソフトウェアがどのように有効な補助手段になり得るかという点に焦点をあてる。続く6章は、調査研究の質（クオリティ）について評価する基準、調査レポートの作成、そしてまた、分析プロセスに関する記録法の解説にあてられる。

本書の当初の構想では、調査研究の質の評価基準に関する章は「コンピュータを用いた質的テキスト分析」と題された章の前に置かれる予定になっていた。しかし、これは結果としては、あまり実践的ではないことが分かった。なぜなら、ソフトウェアの使用それ自体が質の評価にとって関係が深いことが明らか

になったからである。実際、もし当初の構想どおりの章立てだった場合には、読者は、後に続く章ではじめて解説される内容を頻繁に参照しながら前の章を読まなければならなかったであろう。したがって、最終的には、順序を逆にして、評価基準についての章をコンピュータの活用に関する章の後に置くことにした。

インターネット時代には、テキストというものが順序を追って読むもの、あるいは全体を通して読むものであるというよりは、一種のハイパーテキストとしてとらえられることが多くなってきた。実際、人々は必要な情報だけをピンポイントで選択して検索しがちである。本書は、そのような風潮とは一線を画している。つまり、本書で採用しているリニアな構成の場合には、個々のセクションは相互の内容を前提としており、したがって順番どおりに読み進んでいくことが想定されているのである。

Udo Kuckartz

マールブルクにて 2013年4月

## 謝 辞

この本は、私が10年以上から教えているフィリップ大学マールブルクやそれ以外の世界中で行った数限りないセミナーとワークショップをもとにしている。その点に関連して、私は、「体系的な質的テキスト分析」という概念を練りあげ、またその実践的な応用の可能性について検証していく際に助力してくれた多くの学生と同僚から恩恵を受けている。本書の原稿の様々な段階で建設的な議論という点に関して、私は特に以下の人々に感謝を捧げたい — Stefan Raediker、Claus Stefer、Thomas Ebert、Uta-Kristina Meyer、Julia Busch、そして私の妻の Anne Kuckartz。Mailin Gunkel、Gaby Schwarz、Patrick Plettenberg は、本書のレイアウト、参考文献、図表の作成にあたってサポートしてくれた。

いつものようにこの本についても、書籍の執筆というのは、最初に浮かんだアイデアを書き留めることから始まって最終的な版下にいたるまでの長期にわたるプロセスであった。それは大いなる楽しみであり、また挑戦でもあった。このプロセスにおいて私を支えてくれた全ての人々に対して感謝の念を捧げたい。



# 目次

日本語版への序 i

序 v

謝辞 ix

## 1章 質的データの分析 ― さて、いかにおこなうべきか？ ― 1

- 1.1 質的・量的の区別に関する論点整理 1
- 1.2 質的研究法、量的研究法、混合研究法 5
- 1.3 実際の研究において質的データを分析していく際の課題 9
- 1.4 リサーチ・クエスチョンの重要性 12
- 1.5 方法面での厳密性の必要性 15

## 2章 体系的な質的テキスト分析の源流 ― 19

- 2.1 古典的な解釈学 21
- 2.2 グラウンデッド・セオリー 28
- 2.3 古典的内容分析と質的内容分析 40
- 2.4 質的テキスト分析に関する他の種類の実践的アプローチ 46

## 3章 質的テキスト分析の基本概念と作業プロセス ― 51

- 3.1 質的テキスト分析に関する主要概念 51
- 3.2 質的テキスト分析と古典的な内容分析における分析プロセス 64
- 3.3 質的テキスト分析を開始する  
― テキスト、メモ、事例要旨による初期段階の作業 68
- 3.4 カテゴリーを構築する 76
- 3.5 研究例 88

4章	質的テキスト分析における3つの主要な方法	91
4.1	プロフィール・マトリクス — 質的テキスト分析の基本概念	92
4.2	3つの方法の類似点と相違点	94
4.3	テーマ中心の質的テキスト分析	97
4.4	評価を含む質的テキスト分析	123
4.5	類型構築式テキスト分析	140
5章	質的テキスト分析におけるコンピュータ・プログラムの利用	161
5.1	データの管理 — 文字起こし、匿名化処理、チームワークの計画立案	162
5.2	QDA ソフトによる質的テキスト分析	174
5.3	QDA ソフトによる分析 — 上級編	189
6章	質の基準、研究報告書、研究プロセスの記録	199
6.1	質的テキスト分析に関する質の基準	199
6.2	研究報告・研究プロセスに関する記録の作成	205
7章	結 語	211
補論	質的データ分析の基本原則と QDA ソフトウェアの可能性 — 佐藤郁哉	213
I	序 論	214
II	質的調査の魅力と落とし穴 — 7つのタイプの薄い記述	217
III	翻訳プロセスとしての質的調査	218
IV	質的データ分析における脱文脈化・再文脈化と定性的コーディング	222
V	紙媒体でおこなわれる質的データ分析	225
VI	QDA ソフトの概要と特長	227
VII	質的調査の「質的転換」の可能性	232
VIII	QDA ソフトだけではできないこと — 質的調査のアート&サイエンス	235

訳者あとがき	239
注	247
引用文献	251
人名索引	259
事項索引	262

装幀 = 新曜社デザイン室





# 1 章 質的データの分析

## —— さて、いかにおこなうべきか？

この章では、以下の点について解説していく。

- 質的データと量的データの違い
- 「質的データ分析」という用語の曖昧さ
- 質的研究、量的研究、混合研究法の関係
- 調査研究におけるリサーチ・クエスチョンの重要性
- 質的調査で方法的な厳密性を追求していくことの重要性

### 1.1 質的・量的の区別に関する論点整理

「質的データ」と「量的データ」という用語は、それぞれ、どのようなことを意味するのだろうか？ これが「量的データ」であれば、一般の人々の場合であっても、数や統計、経済領域では経費などが連想として浮かぶだろう。それに対して、質的データというのは、それほど自明な言葉ではない。というのも、この用語は、日常生活だけでなく学問の世界でも分野の違いによってきわめて多様な意味を持っているからである。人的資源マネジメントとの関連では、質的データは、たとえば人件費、人数などのように量的な（ハード）データとは対照的に、従業員満足度、動機づけと労働環境のような事柄を指す。一方、地理学者にとっては、様々なコミュニティの住民数などは量的データの典型である。それに対して、特定の自治体を幾つかのゾーンに区分けしていく作業では質的なデータを扱うことになる。心理学においては、質的なデータとは、

尺度タイプの分類で名目尺度ないし「カテゴリカル・データ」を指す。つまり、標準化された（量的な）研究の分野で実際に用いられるデータのことである。また心理学の教科書の中には、「質的データ」という言葉がタイトルに含まれているにもかかわらず、実際には、カテゴリカル・データを量的に分析するための方法について扱っている例さえある。

本書では、量的データと質的なデータの区別に関して、以下の実践的な定義を採用する。

数値データまたは数を量的データと見なす。それとは対照的に、質的なデータは、より多様であり、文字テキストならびに画像、映画、音声記録、人工物などの他にも多くのものが含まれる

この10年ほどのあいだにマルチメディア革命が進展し、また私たちの文化や生活において視覚メディアが優勢になってきている。それにもかかわらず、社会科学や心理学あるいは教育関連の学問領域では、質的データと言えば文字テキストがいまだに優位な位置を占めている。以下で解説していく質的データ分析法は、もともと「文字テキスト」と呼ばれるタイプのデータを想定して開発されてきたものである。また、本書でこれ以降取り上げる分析例についても、主として文字テキストをデータとして扱っている。しかし理論的には、本書で紹介する方法は、画像、映画、音声記録その他のタイプの質的なデータに対しても応用可能なものである。なお、著者は、社会学の方法論に関する教科書において往々にして見られる論調とは対照的に、質的データが他の種類のデータ（量的な）よりも劣ったものだとは考えていない。

実際、実際の分析に関しては、尺度水準の場合のような階層関係が存在するはずもない。尺度水準に関しては、名目、序数、間隔と続いて最後に最高レベルとして比率尺度が位置づけられる。しかし実際には、「本当の科学」というものは必ずしも数値化ないし定量化と統計分析に終始するものではない。この点は、他の学問分野の例を眺めてみても明らかである。事実、地球物理学と医療を含む科学の多くの分野では、科学者は非数値的なデータを大いに活用している（たとえば先進の医学映像技術、MRI [磁気共鳴画像]、NMRI [核磁気共鳴画像] 等の分野の例がある）。したがって、質的データは、決して「劣った形式」

のデータなどではないのである。質的データは、むしろ、数値データとは「異なる形式」のデータなのであり、また、それにふさわしい複雑かつシステムティックな分析が必要とされるのである。

この点に関する興味深い指摘が、BernardとRyan（2010, pp.4-7）によってなされている。彼らは、「質的データ分析」という用語が持つ特有の曖昧さについて指摘しているのであるが、これは、「質（quality）」、「データ（data）」、「分析（analysis）」という3つの言葉を様々な形で組み合わせてみれば即座に理解できるだろう。「質的データ分析」が上で述べたように、テキスト、画像、映画などという意味での質的データについての分析を指す場合には、「質的データ分析」はあらゆる種類のデータ、つまり、質的データと量的データの両方を含むデータに関する定性的な分析を含むことになる。データの種類と分析法という2つのものを区別することによって、表1.1に示した2×2の表（Bernard & Ryan, 2010, p.4による）ができることになる<sup>[1]</sup>。

この図式は、容易に思い浮かべられる2つのセルが存在するだけでなく、想定外の2つのセルがあり得ることを示している。左上のセルAと右下のセルDは、私たちにとって非常になじみ深いものである。セルAには、解釈学的分析法、グラウンデッド・セオリー、あるいは他の質的分析のテクニックを使っておこなう「質的データについての質的分析」が含まれる。セルD、つまり、「量的データの定量分析」も、私たちにとって馴染みがあるものである。これには、通常の統計的方法（すなわち数値データを分析する際の典型的な方法）を使用する場合が含まれる。

この表には、通常は必ずしも想定されない2つのセル、つまり、量的データの質的分析（セルB）と質的なデータの量的分析（セルC）が含まれている。後者には、単語の出現頻度と単語の組合せに関する分析が含まれる。量的データの質的分析（セルB）は、量的データに関する解釈という作業が含まれている。つまり、量的データについての統計分析が実施された後で、その解析結果が表や係数あるいはパラメーターの推定などの形式で示されるのであるが、この時点で、解析結果の意味について改めて確認し解釈をおこなうことになる。この「解釈」という手順がともなわない場合、生データとしての数値に関する量的分析は、不毛で文字通り無意味なものとなる。MarshallとRossmanが以下で強調しているように、量的分析であっても解釈は必要不可欠な行為なのである。